

献血者数のシミュレーションの見直しについて

【2014年日本赤十字社試算：将来の輸血用血液製剤の需要推計】

○東京都福祉保健局がまとめた「2012 輸血状況調査」によると、輸血用血液製剤の約85%が50歳以上の患者に使用されている。

○将来推計人口を用いて、将来の輸血用血液製剤の供給予測数を算出すると、2027年に輸血用血液製剤の供給量がピークに達すると試算。

【2014年日本赤十字社試算：必要献血者延べ人数のシミュレーション】

○上記にて試算した供給予測数について、必要延べ献血者数を算出すると、2027年には約545万人必要となるシミュレーションとなった。

○2013年の年代別献血率(=年代別献血者延べ人数/年代別人口)を今後も維持すると仮定し、将来推計人口より、仮想の延べ献血者数を算出すると、2027年には約459万人になると推計され、約85万人の献血者が不足することが示された。

【輸血用血液製剤の供給実績】

○しかし、ここ数年の輸血用血液製剤の供給実績は、2027年まで増え続けるシミュレーションとは異なり、減少傾向にある。

【2017年日本赤十字社試算：将来の輸血用血液製剤の需要推計】

○輸血医療を取り巻く環境変化も捉えた需要推計を行うため、輸血用血液製剤の使用量が多い医療機関を対象に、アンケート・ヒアリング調査を行い、改めて将来の需要推計を行った。

○高齢者人口は増加するものの、腹腔鏡下内視鏡手術など出血量を抑えた医療技術の進歩等により輸血用血液製剤の需要量は、10年後には減少となる予測となった。

【2018年日本赤十字社試算：必要献血者延べ人数のシミュレーション】

○2017年の需要推計を踏まえ、2016年度の輸血用血液製剤の供給実績から必要延べ献血者数を試算した結果、2022年度には約485万人、2027年度には約477万人となった。(平成28年度献血者数：約483万人)

【結論】

○必要延べ献血者 545 万人に対し、約 85 万人の献血者が不足するという 2014 年のシミュレーションを見直すこととする。

○輸血用血液製剤の需要予測を踏まえた 2027 年の必要延べ献血者数は、現在よりも少なくなる見込みである。

※なお、2018 年のシミュレーションでは、必要原料血漿量は一定で見込んでいる。原料血漿から製造される血漿分画製剤は、適応拡大などグロブリン製剤の需要増大が世界的に見込まれており、2024 年には国内 3 社が配分を希望する原料血漿の合計量が 141 万リットルというデータもあることから、今後、原料血漿の需要動向を精査した上で、改めて必要献血者数のシミュレーションを行う必要がある。